

第4章 中間期

1 はじめに

中間期は、大学生活に慣れ、その人なりの生活スタイルを作っていく時期です。学業やサークル、アルバイト等、生活の幅が広がる半面、自律的な生活の維持がテーマになります。また、自分らしさを探求していく時期ですが、一方で、それにとらわれて目的意識や意欲を失うこともあります。対人関係では、友人や恋人等との関係での葛藤や苦しさが問題となりやすい時期です。

様々な面で大学生活に充実感を持ち、意欲を高めていく場合と、そうでない場合との差が大きくなりやすい時期です。

2 中間期における相談と対応

2-1 事例：学業とアルバイトの両立に苦勞した男子学生

Cくんは、大学3年生の理系男子学生です。大学生活にも慣れてきたと感じたこともあり、1年生の後期が終わった春休みからファミリーレストランでアルバイトを始めました。当初は週に2回程度の勤務でしたが、次第に働く日数も時間も増え、午前0時を過ぎるまで働くようにもなりました。慣れるまでは大変さも感じていましたが、次第にその面白さにひかれ、社員からも信頼を得、アルバイトの中で中心的な役割を担うようになり、そのことへの充実感を強めていきました。一方で、学んでもすぐに実際的なことに役立つわけではない大学の勉強

への意欲が薄れていきました。

こうして、アルバイトに多くの時間を割くため、レポートや課題に取り組む時間を十分とれず、朝なかなか起きられずに授業に遅刻したり欠席したりすることが増えていきました。取得した単位も、2年生の前期から後期にかけて次第に減少していき、3年生の前期にはほとんど単位を取得できない状態にまでなりました。

Cくんのご両親は、単位の取得状況を見て危機感を持ち、本人に問いただしたことで、Cくんの生活状態に気がつき、3年生の後期開始前にCくんと一緒に学生相談機関を訪れました。

面接時、Cくんはアルバイト先での自分の責任の大きさを語り、「その気になれば勉強は何とかなる」と楽観的に考えていました。しかし、これまでも同じように考え、学期初めだけは学校に通うものの、それが続かなくなることの繰り返しであることを自分で認めるようになりました。そして、自分にとっては4年間で卒業することが大切であること、アルバイト先で学業面の状況を話せば理解してもらえそうだということを確認し、アルバイトを大きく減らして授業への比重を高めました。それまでの単位取得の後れを取り戻すことは簡単ではありませんでしたが、アルバイトで身に付けた頑張りを活かし、無事卒業に至りました。

(1) 学生の理解

①自律的生活を維持することの難しさ

大学生活はそれまでの生活と違い、授業時間の組み立て、それ以外の時間の過ごし方等、自分で決めて行動することが増えます。学生にとっては自由度が高くなりますが、同時に、自分

の行動に責任を持ち、主体的に行動することが求められます。特に、独り暮らしを始めた学生にとっては、学業だけではなく、家事等も含めた生活全体を管理し、維持していくことが重要になります。

自律的な安定した生活を維持していくことが、充実した大学生活の基礎になりますが、そこでつまづく学生は少なくありません。特に、大学生活に慣れ、余裕ができた中間期に生活が乱れてしまいがちです。多少の失敗や無理をしながら、学業やそれ以外のやるべきことについて自分なりのペース配分を作り上げていくことが望まれます。

②自分らしさの探求と目的意識・意欲の喪失

青年期は、アイデンティティの確立のために重要な時期であり、大学生活の中では、特に中間期に自分らしさを探求する傾向が強まります。アルバイトやサークル等、学業以外の様々な体験を通して、学業では得られない数多くのものを吸収していきます。そして、それが自分について見つめ直したり、新たな気づきを得たりする契機となり、自分の幅を広げることにつながります。

一方で、それまでの自分の価値観が揺らぎ、動揺しやすい面もあります。アルバイトやサークル活動の充実感に強くひかれ、学業に意義を感じられずに意欲が薄れることも少なくなく、場合によっては、大学生活やその後の目的意識を見失い、学校から大きく足が遠のくことにもなります。

(2) 教員の対応のポイント

①見守りと機を見ての働きかけ

学生期の中でも、中間期は様々なことに取り組み、自分らしきを作っていく時期であり、幅広い体験を積むことが学生の豊かさにつながります。学業に熱心に取り組むことはもちろん大切なことですが、この時期だからこそできることに挑戦することも必要なことです。したがって、自分なりの生活スタイルを確立していく学生の動きを見守っていくことが、教員の役割となります。

ただ、Cくんのようにアルバイト中心の生活に傾き、学業がおろそかになるなど、生活全体が崩れることもあります。また、自分の価値観の揺らぎに対する戸惑いを感じることもあります。そうした際には、教員から学生に声をかけ、生活や自分自身について考える手助けをしてください。そのためには、授業への出席状況や履修状況等を通して学生の学業への取り組みを把握しておくこと、いざという時に学生が相談しようと思えるような関係を普段から作っておくことが大切です。

更に、保護者から連絡や相談を受けることもありますし、状況によっては、教員から保護者に連絡する必要も生じると思われます。そうした際には、保護者と連絡を密にし、協力して対応することが特に大切です。

②幅広い体験の中でバランスを取るための助言

学業に限らず、幅広い体験をすることは、学生の自己形成に重要なことですが、その分、生活の中で何にどれくらいの時間やエネルギーを注ぐかということについてのバランスをうまくとることが難しくなります。生活全体を俯瞰し、また、自分の大学生活4年間を展望した上で、やるべきこと、優先すること等を明確にしていくような働きかけを行うことが必要です。

場合によっては、生活が極端に学業のみに限られ、アルバイトやサークル、友だちづきあい等がほとんどないような学生の場合、学業以外のことにも目を向けてみるように働きかけることが大切な場合もあると思われます。

教員自身が、学生時代に体験したこと、社会人として体験したこと、それらを通して考えたこと等を話すことが、学生が自分の体験や価値観を見直す契機となるかもしれません。

2-2 事例：恋人との別れに苦しさを感じていた女子学生

文系女子学生Dさん（2年生）は、同じ学部の同級生と付き合い始めて数か月が経過しました。Dさんとしては、大学に入って初めての恋愛であり、同じ学部ということもあり、なるべく二人で同じ授業を履修し、キャンパスではほとんどずっと一緒に行動していました。やがて、一人暮らしをしているお互いの部屋の合鍵も持ち、恋人がDさんの部屋に泊まっていくことも増えました。Dさんにとっては、こうした二人の付き合いが楽しく、安心できるものでした。

しかし、恋人が絶えず二人きりでいることを強く求めるようになり、Dさんのサークル活動や同級生の女子との付き合いにも難色を示すようになりました。更に、Dさんが同じサークルや学部の男子学生と話したり、電話やメールをしたりすることに激しく腹を立て、それを一切認めなくなりました。

そのため、二人の間でけんかが増え、Dさんは交際を続けることが難しいと感じるようになりました。しかし、別れ話をすると、恋人は、ある時は泣いて謝り、ある時は激しく怒りだして物を壁に投げつけるなど、大きく動揺しました。Dさんも、相手を見放すという罪悪感や、相手が何をするか分からないと

いう恐さ等から、別れることができないまま、疲労感を募らせていきました。こうした状況で、Dさんは学生相談機関を訪れました。

カウンセラーは、Dさんの気持ちを聴いて受け止めると同時に、自分の思いの伝え方や、友人等の協力を得て恋人と別れることについて検討しました。そして、Dさんと恋人の双方を知っている男女複数の友人たちが間に入り、二人は別れることに合意しました。Dさんは、その後もしばらくは、恋人から何か言われたりするのではないかと不安を感じていましたが、恋人からのそうした動きもなく、Dさんは次第に安心できるようになりました。

(1) 学生の理解

①恋人との関係の心地良さと苦しさ

恋人との付き合いは、異性との親密な関係を築いていくことです。お互いに相手のことを大切に思い、自分が頼りにされるというかわりには、同性の友人関係では得られない心地良さを学生にもたらしめます。また、親密な関係の中で、自分を確かめ、新しい自分を作っていくことにもなります。

一方、親密になることで、二人以外の関係が見えにくくなったり、相手と自分の境界があいまいになったりすることがあります。そのため、相手と一緒にいないと不安になり、いつでも自分の考えや期待に沿うことを求める気持ちが強まりがちです。そして、そうした思いを向けられると、相手の思いを強要されるという苦しさや束縛感を強めることにもなります。親密な関係を持ちながら、それぞれが主体的に動けることが大切ですが、十分な経験がない学生にとっては難しく、過度に相互依存的に

なることがあります。

②親密な関係を終えることの難しさ

親密な関係を始めることに比べて、それを終えることは多くのエネルギーを要し、簡単なことではありません。一方が別れを考えても、もう一方がそれを受け入れられないことが多く、それぞれの中に様々な感情が渦巻き、ともに不安定になったり、二人の間の葛藤がより強まったりします。

自分の思いを率直に冷静に伝え合うことが望まれますが、Dさんやその恋人のようにうまくけじめをつけることができないことも少なくありません。特に、別れを切り出された側がそれを受け入れ難く、自分の思いに固執しすぎると、しつこく付きまとう等の行動につながり、トラブルに発展することもあり得ます。

(2) 教員の対応のポイント

①親密な関係を続けること、終えることを見守る

恋人と付き合うことは、学生にとって大きな安心感をもたらすものであると同時に、二人の間の葛藤を解決しながらより親密な関係を築いていく体験になります。教員から見れば、時に危うい関係に見えることもあると思われかもしれませんが、他の関係では生じない様々な思いや感情を抱くことは、学生が自分を作っていく上で大切なものです。そのため、過度に干渉的・指示的にならずに、学生の付き合いを見守り、自主的な判断を育てていくことが大切です。

ただし、恋人との関係がこじれ、時にトラブルに発展するような難しい局面になることもあります。そうした時には、学生

本人の話を聞き、本人を支えるだけでよいか、相手に直接働きかける必要があるかどうかを判断することが大切です。現実面での対応が必要だと考えられる場合には、周りの人と連携して動くことが望ましく、場合によっては学生相談機関の活用を検討してください。

②開かれた対人関係を作ることへの働きかけ

Dさんと恋人の当初の関係のように、恋人との関係が深まる時、そこにだけ目が向き、「二人きりの世界」になることがあります。それが、相互依存的な姿勢を強め、相手を過度に束縛・制限することにもつながります。

こうした状況にならないためには、恋人との関係を大切にしつつも、サークルや学部の友人、更には先輩や後輩等との様々な関係もまた大切にしていけるように伝えることが必要です。恋人との関係やその中での悩み等を普段から友人たちに話せるような関係を持っていると、恋人との関係が難しい局面になった時、周りからの援助を得やすくなります。